

研修名 保健衛生 安全対策

令和元年 12 月 13 日(金) 13:00~15:30

シンポジウム 「命を守り、心を育むために」

コーディネーター 猪熊 弘子 氏

シンポジウム 社会福祉法人 大槌福祉会 大槌保育園 園長 八木澤 弓美子氏

社会福祉法人 櫻心会 さくらんぼ愛園 園長 藤山 小百合氏

## 1 講演要旨

1) 2011. 3. 11 東日本大震災で地震・津波を保育中に経験した岩手県大槌町大槌保育園園長八木澤氏の話

- ① 園は東側に海、北側に川がある。避難場所としているコンビニは海拔 6m で園よりは高い所にあるが襲ってきた津波は最大遡上高 22m でコンビニは 2m 以上浸水した
- ② 地震後の行動
  - ・携帯電話のワンセグテレビを見て状況確認
  - ・決められた避難場所(コンビニ)に徒歩で避難後、迎えに来た保護者に約 70 人の子どもを引き渡すがそのうち 6 人が死亡、3 人が行方不明
  - ・沿岸部方面に砂煙が上がるなどの様子の変化に危機を感じ更に山へ避難を開始し、周りの大人に協力を呼びかけ約 30 人の子どもたちを背負うなど四つん這いになりながら山の斜面を登る
  - ・3 日後保護者への子どもの引き渡しを終える
- ③ 園の再建と避難の見直し
  - ・災害復旧費の要件は元通りにすることであるため盛土されないまた被害が起きる場所に園舎を立てることに抵抗を感じ葛藤する
  - ・6 月仮設プレハブ園舎で保育を再開
  - ・被災直後の保護者への引き渡しは行わない
  - ・渋滞する前に 3 分以内に避難できるよう職員の車を配置
- ④ 子どもたちとの関わり
  - ・亡くなった子どもがいることを正直に伝える。「なぜ一緒に避難しようと言わなかった。」と子どもからの素直な言葉は自身が心から感じ悔やむ思いであり心に突き刺さる
  - ・「津波ごっこ」も乗り越えるための大切なあそびと受け止め、また大人が自身が感じる思いから逃げずに子どもたちと丁寧に向き合うことで亡くなった子どもの話が出るようになる

2) 2016. 4. 14・16 熊本地震、6. 19~梅雨前線豪雨による熊本水害で被災した熊本県山都町さくらんぼ愛園園長藤山小百合氏の話

- ① 園は山間部の土砂災害警戒区域にあり、鉄砲水による水害や野生動物の出没が増加する環境の地域だったため地震前に移転をしていた
- ② 地震後、水害後の園の状況
  - ・震度 7 が 2 回発生後、1 ヶ月の余震が 2000 回を超え子どもたちは登園しても保護者と離れることを嫌がり泣きわめく
  - ・じっとしていると子どもたちが不安がるので天気の良い日は園庭で身体を動かして遊び、ベランダで食事をし、雨の日は広間で身体を動かして遊ぶことで少しずつ笑顔が見られる

- ・他の地域から避難してきている子どもも受け入れるがより大きな被害を受けてきたため家に帰ることを泣いて嫌がり、母親たちもいっぱいになりストレスを抱えている状態
  - ・1ヶ月過ぎる頃、子どもたちの中で地震ごっこが始まるが職員は止めさせることなくその姿を受け止めることで落ち着きを取り戻していく(あそびを受け入れるようにと専門家にアドバイスをもらっていた)
  - ・土砂崩れで孤立した地域に食事の支援も行う
- ③ 職員自身が被災者であり車中泊や避難所からの出勤でストレスなどいっぱい抱えていたが、常に子どもたちや保護者、地域を考えた行動をとり、守ってくれた。

### 3) コーディネーターを交えての話

- ① それまでの日々に備えていたことで役立ったことは災害を避けるための移転・シークレット避難訓練で監査のための備蓄や訓練でなく役立つ避難行動を想定する
- ② 被災後の心のケア
- ・におい、温度、当時と似た状況の時に記憶が蘇り、後回しにするほど回復が遅れる
  - ・今まで見たことのない行動を子どもたちがとる
  - ・毎回同じ日時に来る心理士がおり、職員と前回のフィードバックをしてくれることで少しずつ思いを受け止めてもらったと感じる(フィードバックがない心理士と話をしてもわかってないと感じる)
  - ・日頃から職員同士仲良くすることを心がけることも大切
- ③ 職員や子どもが入れ替わり被災経験がどんどん薄れる中、風化を防ぐために地震の絵本を通じて子どもたちに知らせたり本気で避難訓練を行い、職員は日頃から避難行動をとるようにし保護者にも危機意識を伝える
- ④ 激甚災害に指定され災害復旧費を受給するには元の場所で再建しなければならない
- ⑤ そばにいる大人が子どもの命を左右することに緊張感を持ち、子どもの命を災害から守るために子どもとの丁寧な関わりや子ども同士(異年齢)、大人同士の信頼関係を築くことが大切
- ・亡くなった友だちについて「返さなければよかった」と率直に保育士に言える関係を作ることが出来ていたことで卒園後も関係が続く

## 2 感想

これまでに大きな地震、津波が来るといわれる地域で育ち、台風による水害も経験してきたので当時を思い出しながら話を聞いていたが、恐怖心や不安感など「被災経験」の記憶がありながらそれらが薄れ、日頃、危機感のない中で保育をしていることを痛感した。今回の話を聞き、今、地震が来たら、火事が起きたらと想像し改めて避難行動を考えるきっかけとなった。

実際に保育時間中に子どもたちと「どうしたらいいのか」のやりとりを重ね、周りにいる保育者間でさまざまな災害について話す機会を持ち、具体的にどの時間(活動)にはどのように避難行動をとればいいのか、また、保育者一人一人の動きが被らないようその場の状況を判断し行動できるようにしなければならない。当たり前を当たり前で過ごさずに、いつ起こるかわからない災害について今回感じた危機感を皆に伝えていきたい。

(記録 せいかだい保育所 北井千裕)